

前畑遺跡の土塁状遺構

前畑遺跡の土塁状遺構の発見は、これまでの古代大宰府の空間概念を根底から再考する契機となりました。古代官衙と推定されていた岡田地区遺跡は、その境界性という意味でその可能性がさらに高まり、また、『万葉集』の送別宴が行われたとされる蘆城駅家の候補地である御笠地区遺跡は、その東方の宮地岳にある阿志岐山城跡とセットで考えるべき遺跡と見られるようになりました。大宰府をとりまく山々は、大宰府と外界とを画する広義の外郭線としての意味を持っており、そのことを示しているのが前畑遺跡の土塁状遺構なのです。



前畑遺跡遠景（北西から）



前畑遺跡の土塁状遺構

前畑遺跡における土塁状遺構の発掘調査では、これまでに考えられていた単純な版築工法だけではなく、多様で高度な土木技術が古代に存在していることが確認されました。古代山城の土塁や水城・小水城などの築堤にも、花崗岩由来の礫を意図的に混入していたり、加水して混ぜたような地層の様子、地層が波打っていたり、黒褐色土の塊状の盛り土などが見られ、他の遺跡の古代の盛り土にも、前畑遺跡に共通する土工の要素があって、選択的に用いられていることが分かってきました。

古代の盛り土における多様性



大野城跡北石垣付近



大野城跡北石垣付近



大野城跡増長天南城門付近



阿志岐山城跡第12トレンチ



大土居小水城（山村信榮氏提供）



天神山小水城